

開かれた“風”

森下みさ子

10月 秋晴れ

頬をなでる風は、さわやかで心地良かつた。木々は葉裏を返し、運動会を控えて園庭中に張りめぐらされた小旗は、はためいている。

部屋の入口のテラスに机とイスを出して、十数人の子ども達が粘土細工をしている光景が目に止まつた。今までお山の上から駆け降りてきた四、五人の子どものために、保育者が新たに一つ机を用意している。その机は、テラスからもみ出でてプラタナスの近く、園庭の砂

利の上に置かれた。粘土の入ったバケツが来ると、争うようにして一握りずつ取り出す。Yの取り出した粘土はとりわけ大きい。両手に握みきれない程の大きな塊を練りつつ、「うーみーはひろいーな」と口ずさむ。保育者の「みんな何つくるのかな?」という間に、Yは大きな声で「ぼくは海の島!!」と答え、得意そうである。また、「うーみーはひろいーな」と口ずさみ、みんなに向かって、「ぼく、大きいのつくってんのー」と叫ぶ。さわさわと園庭中の木がざわめて、小旗が次々と翻る。Yは坐ったまま風に向かい、うれしくてたまらない

という表情で大きめの口を開け、「ワーカゼーあくなー」と叫ぶ。その後も「ンン……」と口ずさみながら、Yの手は休むことなく粘土に取り組んでいる。立ち上がりで体重をかけて練る。投げ止めながら形をつくる。

しばらくすると、他のメンバーは散ってしまっているが、Yは相変わらずたいたり、指で筋をつけたり、山田をつけたりと、余念なく粘土に関わっている。木々や旗をざわつかせながら風が吹いて来ると、そちらに向かって口をいっぱいに開け、大きな声を響かせる。内容はよく聞きとれないが、その響きは風のざわめきと唱和する。何をつくりあげるというのでもなく、粘土を捏ね、形をつくっては崩しつつ、時々吹いてくる風に「カゼーやれやれ!!」と叫び、仕舞にはただ「カーゼー」と響かせる。その表情が実に生き生きとしている。

「お片付け」の声が掛かるまで、Yの活動は滞ることなく続けられた。

◆ ◆ ◆ ◆

日々の営みの中で、眼に見える物の存在を認めるこ

は多いが、眼に映らないものの語る言葉を聞き、触れようとするその手を感じることは少ないようだ。それら不可視のものの存在に気づかされ、しつとりと抱き止める一時が、子ども等と「共にいる」観察の悦びでもある。この日、汗を渡った大気に、私自身感覚の扉を開いて、小踊りしたい気分に浸されていた。それ故に、私は大気の中に開かれた空間に歩み入り、そこで大気の運動性を満喫している一人の幼児の心に、そっと寄り添ったのだろう。

この日、保育者は部屋という囲まれた空間の秩序を解き放つて、創造を営む空間を戸外の澄み切った大気の中に入用意した。「創造」の原動力は、人の心にふつぶつと浮かび上がる「想像」から生まれやすい。粘土を練るYの心には、いつしか広大な海が生まれてきた。「大きい」「ひろい」と形容するしかない「海」という漠としたものを心に抱いて、Yの手は粘土をまさぐる。そして、寄せては返す波にも似て、創つては壊し、壊しては創るという行為を飽くことなく繰り返している。この漠としたイメージの広がりと、創造と破壊の絶ゆまぬ反復をもたらしたものは、不可視の大気の流れ、『風』であつたろう。

大気が、まさに広大な広がりとしてとらえられるのは、風の動的なエネルギーに負うのではないだろうか。

風を得て初めて木々や小旗は沈黙を破り、その存在を告げ知らせる。風のさわやかなこの日、Yは風の運ぶ存在

の呼び声を聞き、それらを含んだ大気の広がりを感じながら、心の空間領域を果てしなく広げつたつたのだろう。風によってはるか遠くまで拡散したYの心が生み出した状景こそ「海」であり、その広大な世界の一点として追い求めていた像こそ「海の島」ではなかつたか。この時^{*1}「風」は、幼稚園という子どもにとって日常的な空間から、「瞬間的な幻境を発生させる」不可視の力なのであつた。

そしてまた、「風」は不斷の流動によって人間をゆさぶり、イメージの水を波立たせ続ける。Yは何かを創り、創り終えるとすぐ壊し、また創り始める。前述したように「創造」と「想像」を重ねあわせるなら、風によつて不斷に刺激されているYの想像力が、繰り返される創造と破壊、始まりと終わりと、終わることによって再び生まれる始まり、の循環を促しているといえるだろう。
^{*2} 風は一つのはじまりであり、時として一つの終りであ

るにしても、なおその上に、はじまりと終りを結び、繋ぐものでさえもある」という高橋英夫の言葉に従えば、Yの粘土細工を刺激し続けたのは、「風」そのものではないだろうか。

けれども、風はYの活動の背景にあってYに働きかけただけではない。風は、Yの内奥に忍び込み、ゆさぶつて、吹き去ることを繰り返しつつ、Y自身を「風」に化してゆく。「カゼーふくなー」は、禁止の言葉として表出されているのではなく、風に触発されたYの心の揺れが発した言葉ではあるが、ここでは「風」を対象化しているにすぎない。Yはこの時、ようやく、心をゆさぶり散らばらせ、「海」を生み出させた不可視の力に気づいたのだ。それに比して「カゼー やれやれ!!」は、既にYが半分程「風」化し、風のもたらす力に自らを活性化させようとしていることを示している。そして、「カーゼー」と呼ばれるつ風のざわめきに和してゆく声は、Yが「風」そのものに化してしまったことを告げる。いっぱいに開けた口に風を吹き込ませ、それが心をゆさぶると同じ波長でのどを震わせる時、Yはもう「風」なのである。Yの手によつて壊されでは変貌してゆく粘土は、「風」と化し

たYの想像を具現化する対象であり、従って風の变幻自在な動性の表象でもあるのだろう。



こうして、風によって開かれ振り動かされた心の中で、Yと風を重ねあわせる時、子どもとは何と風に近い

存在だろうと思われる。風にあざやかに舞う紙飛行機も、わずかな風を美しい色の回転に変えてしまふ風車も、子どものものである。それら物の力を借りずとも、

子ども等はよく「走る」ことによつて自らを風に化してしまふ。鬼ごっこをする時、帆をあげようとする時、そしてまた何の目的も持たない時にも、子ども等はよく走り、風を生み、その風の一部になつてしまふのである。

そしてまた、風は無形で型に納められないが故に、秩序に安住しやすい人間に、新たな力を注ぎ込んでくれる活性剤である。それ故に、大人は子どもに「風の子」のイメージを付与したのかもしれない。「子どもの日」に高々と掲げられ、天に勇ましい姿をはためかせるこの

よりも、子どもの健やかな成育を望むだけではなく、子どもの存在そのものを祝う心を風に託して表わしているのではないだろうか。緩慢になり、停滞しがちな大人の世界の空氣に、不斷に働きかけ、それを壊しつつも再生を促す力として、子どもに“風”であり続けることを期待したのであろう。

帆船は、帆布に風をはらんでこそ、港を旅立ち、新天地を求めることができる。国旗もまた、風に翻つてこそ、生命力をみなぎらせ得る。

子ども等が、風の声を耳にし、たわむれ、共に走り、風と化すことによつて、子どもの生の営みを更新し続けるように、私もまた、子どもの世界から吹き来る風を、私の心の帆にはらませなくてはいけないだろう。子ども等の風になびく布になり、その一陣の風に舞う紙になり、時には自ら風となつて、子どもの世界をひた走つてみたい。

(お茶の水女子大学)

* 1 · 2 高橋英夫『神話空間の詩学』

一九七八年 青土社